

サトリの  
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗長久寺住職  
月崎了浄さん

第43回

私は1995年の阪神・淡路大震災をきっかけにボランティア活動を始めました。その後、新潟県中越沖地震、宮城県沖地震の際も被災地に入り、活動を行いました。そして2011年3月11日の東日本大震災。当初はニュースなどでも被災地に入らないようにと報道されていましたが、私は震災から10日後、岩手県大船渡に入り、事前調査を行いました。それまではNPO法人アースの一員として、また私個人として活動していましたが、この年の5月に日蓮宗千葉県西部宗務所で役職に就いたこと

もあり、宗務所単位で活動できないかと考えました。そして同年10月、僧侶と檀信徒、総勢80名以上を伴い、宮城県塩竈市で1回目の慰霊法要と復興支援を行いました。

また、余震も続いている時期。高齢者の多い檀信徒を連れて安全が確保できるのか、被災地の方々から理解を得られるのか……反対意見もありました。実行までに時間はかかりましたが、話し合いや調査を重ね、無事、団参を行うことができました。



石巻市で宗務所、日蓮宗、東支参り、復興支援法要に参加した。参加者はヒマワリを献花。

被災地で慰霊供養を行う  
ことで復興の足がかりに

震災などの際、被災地の寺院や僧侶は国や自治体から支援が受けにくいという現実があります。そこで私たちが施主となり、被災地のお寺に塔婆供養を申し込むのです。その供養料を支援金として納めることで、わずかでも手助けになればと考えました。また、檀信徒には、被災地の現状を見て、お土産を買うのも復興支援になることを伝えました。こうして2012年10月福島県いわき市で第2回、今年3月に宮城県石巻市で第3回慰霊団参を行うことができました。

石巻では、児童・教師74名が亡くなられた旧大川小学校で慰霊供養を行いました。父兄が夏にヒマワリを植え慰霊しておられることを知り、法要ではヒマワリ20本

感謝の心に変えて  
他者のために生きよう

震災に限らず、お子さんを亡くされた親御さんの悲しみは消えることはありません。「こうすればよかった」と自分を責め、「なぜこうしてくれなかった」と他者を責めていては悲しみは深まるばかりです。楽しい思い出を一緒に過ごしてきたわが子。その子が悲しい生涯ではなく、幸せな一生だったとするためにも、「ありがとう」の感謝の心に変えてみてはいかがでしょうか。それには自分のためではなく、自分以外の誰かのため、社会のために生きること道は開けます。これをしたら誰かが喜ぶ、これが誰かの助けになる……生かされた者のこのような心の持ち方、それはそのままお子さんが喜んでくれること。これこそが、亡き方が仏になるために供に仏の心を養っていく「追善供養」なのです。

自分以外の誰かのために  
生きることで道は開けます

つきざき・りょうじょう 1960年生まれ、千葉県出身。身延山高校を卒業後、立正大学仏教学部へ。大学卒業後は千葉県茂原市の小さな寺の住職を務め、1992年より長久寺の住職となる。1995年の阪神・淡路大震災の際ボランティアとして活動したことをきっかけに、NPO法人災害危機管理システムEarth(アース)に参加。現在は日蓮宗千葉県西部宗務所の伝道担当事務長も務める。